

民主青年新聞

●ホームページ www.dylj.or.jp ●Eメール minsin@dylj.or.jp

見どころ

ロシアのウクライナ侵略 連帯と行動で無法許すな(3面)
「理不尽な校則」5項目が全廃 高校生の声が動かした(6、7面)
大企業がため込んだ内部留保への課税で、賃上げや気候対策を(10、11面)

分断乗り越え、連帯広げ、新自由主義を転換する



▶都内で開催された「生の声」運動中間報告会の模様

「生の声」運動中間報告会

3月19日、青年の実態と思いを丁寧な問いかけでつかむ「いまの暮らしと政治」について。新自由主義を乗り越えるための青年の生の声」運動(「生の声」運動)の中間報告会が行われました。報告会はオンラインで配信され、各地では視聴会後の各地のとりくみを紹介します。(文中は一部仮名、塩田悠玄記者)

切実な実態明らかに

21年11月からとりくまれた「生の声」運動は、中間報告会の時点で114人分の聞き取りが集まりました。報告では「給料についての聞き取りが集まりました。多くは「貯金できていない」と答えていました。報告を行った中山歩美副委員長は冒頭、「生の声」運動について、「このとりくみ自体が新自由主義的な分断を乗り越え、青年の中に連帯を広げ、可能性を持ったとりくみであることが実践をもって示された」と述べました。その上で、聞き取りから見えてきた3つの特徴について報告しました。

特徴の一つ目は、「多くの青年が心の底から今の暮らしに『満足している』とは言えない状態である」ということでした。多くの青年が「生活に不満はない」「困っていない」と答えていても、客観的に見ると新自由主義の中で青年全体の生活実態が深刻になっていくことが明らかになりました。報告では「給料についての聞き取りが集まりました。多くは「貯金できていない」と答えていました。報告を行った中山歩美副委員長は冒頭、「生の声」運動について、「このとりくみ自体が新自由主義的な分断を乗り越え、青年の中に連帯を広げ、可能性を持ったとりくみであることが実践をもって示された」と述べました。その上で、聞き取りから見えてきた3つの特徴について報告しました。

特徴の二つ目は、「多く不安定な雇用形態が増えたことが、青年が抱える閉塞感や将来への不安につながっているのではないかと報告されました。特徴の三つ目は、「多くの青年が日本には格差と貧困があり、それは解決する

べき問題だと考えている」とです。その背景には、格差と貧困の問題がコロナ危機によって一層「個人に押しつけられる問題」として浸透したこと、そしてその広がりを後押ししたのが、民青が青年と共同して進めてきた食料支援活動や学費値下げなどの運動であったことが聞き取りから見えてきました。聞き取りでは、最初は「格差と貧困は仕方ない」と話していた青年も、コロナ危機の事態には決して「仕方ない」とは言わず、「なんとかしなければならぬ」と話していたといます。中山副委員長は、「新自由主義、そして根本にある資本主義の問題に行きつつかざるを得ないこの『格差と貧困』という問題について、私たちが青年と共同した運動の中でこれだけの認識を広げることができたことは、今後社会変革を大きく前に進める上でも貴重な到達点として、大いに確信しよう」と呼びかけました。



▲報告を行う中山歩美副委員長

中山副委員長は、「報告や各地の経験を聞いた青年は、「私も『勉強しなかつた自分が悪い』『バイトを選んだのは自分だから』と思ってきたが、そもそも社会のしくみを変えていかなくては生きることがままならない状況なのはおかしいとあらためて思った」(青森)、「青年との間につくられてしまった壁をお互いが打ち壊し、一緒に乗り越えていくにはどうしたらいいのか模索して、自分たちの求める希望ある社会への展望をつかむための革新的なとりくみなんだと感じた」(岡山)、「とりくむのもっとやりたくなる活動だと思った。まずは踏み出してみることが重要。『青年に対して線を引いていたことを自覚した』という発言者が複数いたのが印象的。同盟員自身の認識を発展させる意味でも有意義な活動だと思った」(東京)など、「生の声」運動の意義について深めました。また、「各地の発言で『率直にお願いすればみんな快く引き受けてくれる』とあって勇気が出た。高校の友だちにお願ひしてみようと思う」(福島)という決意も語られました。

とりくむ意欲強めた

報告会では、5都府県の「生の声」運動にとりくんだ経験を交流。行動提起と

また、報告会では、首都圏青年ユニオンの原田仁希(東京都)など、「生の声」運動の聞き取りをまとめた5月末まで、党青年・学生委員会責任者から速く引き受けてくれる」とあって勇気が出た。高校の友だちにお願ひしてみようと思う」(福島)という決意も語られました。